

再発見！天草の森・川・海 第3弾
今から30年前、路木川河口ではチヌがいっぱい釣れていた！

「再発見！天草の森・川・海」実行委員会では、これまで2回(2015年5月・12月)にわたり、河浦の古江岳から路木川、その河口、羊角湾の観察会を実施してきました。

そういったなかで、「30年前には路木川の河口でチヌがいっぱい釣れていた」という話を聞きました。30年前といえば昭和の終わりの時期です。列島改造の嵐が吹き荒れた後ですが、それでもチヌはたくさん釣れていたというのです。チヌだけではなく、ワタリガニやアサリも豊富で、旬の時期には、毎日のように食卓に上がっていたようです。その更に30年前の戦後間もない頃であれば、羊角湾の海の幸は、今とは比べものにならないくらい豊かだったに違いない、という思いがしきりにします。

羊角湾には、一町田川、早浦川、路木川をはじめ、いくつもの川が流れ込んでいます。その昔、一町田川の河口ではノリやカキの養殖が行われていたようです。早浦川や路木川にはオオウナギが上がってきていたと聞きます。森―川―海の水の大循環が豊かだったとき、羊角湾のあちこちではイワシの地引き網漁も行われていました。路木川の河口では、春先になると、アオノリを採る人やシロウオ漁をする人で賑わっていました。森―川―海の流域生態系が羊角湾の生産を支えていたのです。しかし、路木川河口のアオノリは、3年前から激減しているそうです。路木川の上流がダムでせき止められ、水の循環が断ち切られたのも3年前です。気になるところです。

実は、羊角湾とその周辺の家や川、集落の全体が、これまでの人間と自然の関わり方を検証し、これからの望ましい人間と自然の関係を考える上で、極めて重要な場所ではないかと考えられます。

自然の生産性は、川と海、陸と海などの境界がはっきりせず、連続的につながっているとき、最も高くなります。この連続したつながりが水や様々な栄養分などの循環をスムーズにしてくれているのです。汽水域がなくなってしまうと、いつの間にか、釣れていた魚が釣れなくなってしまうたりします。その変化は徐々に進行しますので、私たちはよほど注意していたとしても、その因果関係に気づかないことが多いのです。

そこで今回は地元の古老の話聞き、羊角湾の変化について学びます。また、刻々と変わっていく自然の有り様を観察し続けることは、再発見の基本ですので、今回も古江岳から路木川、その河口の羊角湾を見て回り、大きな変化がないかどうかチェックしたいと思います。

たくさんの人びとの参加をお願いします。